

授業をつくる

大学教員は大学で複数の授業を実際に担当していますが、多くの教員は教員免許を持っていないと思います。また、教員それぞれが担当している授業には、それらに対応する学習指導要領もありません。大学の教員は、一人ひとりの研究のバックグラウンドやその熱意、個性、経験などを資産とし、大学にふさわしい独創的な授業内容を組み立て、学生に理解できるように工夫して授業を進めています。

大学では、学生自身が学ぶことが中心です。それゆえ、学生にとって、何をどのように学び、学ぶことによってどのような目標を達成できるのかを知ることが大変重要です。大きな目標は大学全体の教育目標と学部・学科の教育目的に謳われています。それら設定された目的・目標を実際に実現するしかけがカリキュラムです。学んでいく学生だけではなく、授業を担当する教員もカリキュラムを十分に理解していることが前提です。カリキュラムはつまるところ教員の個々の授業から編成されているからです。

一人ひとりの学生が自分自身の学習計画を立てる上で、シラバスは決定的に重要です。教員は、まず、自分の担当する授業がカリキュラム全体のなかでどのように位置づけられ、どのようなねらいを持っているかを把握します。また、その授業で学生に何をどこまで伝えたいかを考えます。そして、学生に対して学ばべき到達目標を設定します。学生の視点から見ると、4年間で自分が学んでいくカリキュラムの中で、この授業はこのような位置づけで、このような範囲の内容で、このレベルまで学べば良いのだとわかります。シラバスは教員と学生の間の約束をしたためていますが、実際は、授業の中で理解度や授業方法をお互いにチェックしながらシラバスに載っている約束事が果たされていきます。

授業は教員と学生が双方で作りあげていくものです。教員からの一方的

な授業の進め方ではなく、学生が積極的に授業に参加し、教員と学生とのコミュニケーションを通して授業をつくっていくことは、学生自身が学ぶという大学教育の一つの姿です。

学生による授業評価は、学生側から見ると、自ら授業に参加していくという1つの形態となります。教員側では、シラバスで意図した授業をどの程度の学生が認識しているかという1つの指標ともなります。学生による授業評価は、このように、教員と学生との間のコミュニケーションですから、双方がその結果を見て、より良い授業をつくっていくために、また、その基礎となるより良いシラバスをつくっていくためにも活用できるものです。

本学共通教育は平成12年度に外部評価を受けました。外部評価で挙げられた課題の一つが、個々の授業を対象とする学生による授業評価を実施すべき、というものでした。平成13年度に、文部科学省から教養教育改善充実特別事業経費（953千円）および学内から全学教育関係経費（3505千円）を受け、共通教育・学生による授業評価研究チームが学問的な立場から学生による授業評価の在り方について研究しました。共通教育委員会は、その研究結果に基づいて平成14年度から毎学期全開講題目にわたって学生による授業評価を実施することを決定しています。

最後になりましたが、膨大な資料の整理および集計結果の分析に心血を注いでいただいた授業評価研究チームに対して深謝いたします。

平成14年3月

共通教育主管

奥田一雄